国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成25年12月1日発行　第37巻第12号通巻第435号

月刊みんぱく

2013 12月号

特集 稲作以後

佐々木高明元館長の人と学問　樫永真佐夫
イネの栽培化のはじまり　那須浩郎
「水田文化」という視座　安室 知
からっぽな手　藤原辰史
米食悲願民族の食卓　原田信男

原色の飛び交う街へ

Boo·j·il（ブージル）

プロフィール
1984年生まれ。イラストレーター、エッセイスト。海外ひとり旅から生まれた極彩色でピースフルな作風で、観る人を優しい気持ちにしてくれる不思議な力を持つアーティスト。昨年NHK Eテレで著書『おかっぱちゃん旅に出る』（小学館文庫）がアニメ化され話題に。
http://boojil.com/

ちょうど六年前、とある雑貨屋でメキシコの民芸品に心を奪われた。極彩色に彩られた色彩感覚の鋭さ、ユニークなモチーフ。ドキドキする。創作意欲が瞬時に湧いた。いてもたってもいられず、わたしはメキシコにひとり、旅に出た。飛行機で一五時間かけてメキシコシティへ。その後七時間バスに乗り、民芸品の種類の多さで有名なオアハカと言う田舎町へ。初めて訪れるオアハカの町並みは、どこを歩いてもカラフルで絵の具を散りばめたパレットのよう。太陽が燦々（さんさん）と輝く空の下、ブーゲンビリアが咲き乱れ、空のブルー、花のピンクの美しいコントラストがわたしをすっかり魅了した。帰国後、「色の組み合わせに決まりなどない」と感じ、わたしの作風は一変した。もっと自由に今まで以上にカラフルな絵を描くようになった。

あれから月日は流れ、五年もの間わたしはずっとメキシコに想いを馳（は）せていた。「メキシコで民芸品作りを学びたい」。日本での活動を休止し、昨年わたしは長年の夢だったメキシコ留学を決意する。大きな期待を胸に飛行機に乗り込んだ。無事到着したのはいいがその後事件は起こった。

到着して一〇日目、なんとわたしはメキシコシティで拳銃強盗の被害に遭い、発砲され貴重品を全て盗まれるという恐怖の体験をする。しかも日中のタコス屋である。しかし不幸中の幸い、わたしは無傷だった。心は不安で固められ、わたしの頭を悩ませた。「今すぐに日本に帰る？ 帰らない？ 今帰ったら、もう二度とここには戻らないだろう」。一週間ホテルで悩んだ末、再発行されたパスポートを手に、勇気を出してここに残ることを決めた。後悔はしたくなかった。留学先は大好きなオアハカ。長距離バスに乗り南へ。車窓から外の景色を見ていた。乾いた大地に咲くたくましい大きなサボテンたち。雄大な景色を眺めながら私はひとり泣いていた。街に着くまでの時間、何度も自分を励ました。

あれから留学生活を終え、この春無事日本に帰ってきた。スペイン語も話せるようになり、現地に友達も増え、民芸品作りも習得した。留学中の経験は何にも代え難い宝ものとなり、人生で一番と言っていい程、毎日がキラキラと輝いていた。目の前にある今日は、「今」この瞬間しか味わえない特別なもの。明日はずっと目の前に現れず、昨日に戻ることは決してできない。わたしは「今日」を大切にしたい。あの時の自分の判断は、これからのわたしの人生をきっと豊かにしてくれるだろう。

月刊 みんぱく
12月号目次

1 エッセイ 千字文
原色の飛び交う街へ
Boojil

2 特集
稲作以後
2 佐々木高明元館長の人と学問 樫永 真佐夫
4 イネの栽培化のはじまり 那須 浩郎
5 「水田文化」という視座 安室 知
7 からっぽな手
——戦後秋田の『農民詩集』から 藤原 辰史
8 米食悲願民族の食卓 原田 信男

10 似たモノさがし
みんぱくのマドンナたち
古沢 ゆりあ
12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
北アリゾナ博物館
伊藤 敦規

16 多文化をあきなう
地域と世界がつながるフェアトレード
土井 ゆきこ

18 フィールドで考える
物理学者のフィールドワーク
中家 剛

20 人間学のキーワード
マーケットデザイン
安田 洋祐

21 異聞逸聞
ベトナム市民社会フォーラムの誕生
伊藤 正子

22 制服の世界、世界の制服
王宮の楽師——ジャワ島西部チルボンのスカテン
福岡 正太

24 次号予告・編集後記

特集

稲作以後

佐々木高明民博元館長は焼畑への注目から『稲作以前』に始まり、水田稲作にとらわれない日本の農耕文化の多様性をグローバルで学際的な視点から明らかにしてきた。それはちょうど、日本の正式な統計から焼畑が消滅し、「日本の農業は水稲耕作」という農業観が当たり前になる一九六〇年ごろのことであった。とはいえ、日本列島における農耕文化に対する水田稲作のインパクトの大きさは、疑いようがない。そこで、『稲作以前』以降に展開された日本の農耕文化論をふりかえりつつ、稲作先進国日本における稲作とコメ研究の最先端を紹介し、どうして日本人はそんなに水田（米）にこだわるのかを、改めて考えたい。

市街地の水田にサギが降り立つ。兵庫県小野市。撮影・日浦慎作

佐々木高明元館長の人と学問

樫永真佐夫　民博 研究戦略センター

六月一二日に本館で「佐々木高明先生をしのぶ会」が催され、講堂で鼎談がおこなわれた。

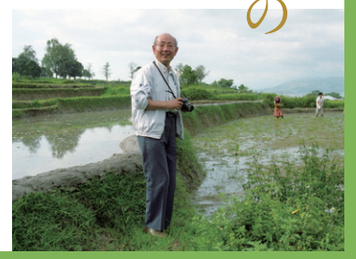
話者は、佐々木元館長とは京大在学中から五〇年来の研究仲間であった石毛直道（民博元館長）、佐々木元館長が立命館大学教員であった一九六〇年代から学問的薫陶を受けた松山利夫（民博名誉教授）、佐々木元館長らの「照葉樹林文化論」に強烈な刺激を受けて稲作研究に邁進した佐藤洋一郎（京都産業大学教授）の三氏。

須藤健一館長によるご紹介に引き続き、各氏が佐々木元館長の幅広い研究の足跡を、個人的な思い出をからめつつナビゲートした。

（以下、敬称略）

農耕文化論を軸とする佐々木学

松山によると、佐々木は『稲作以前』（一九七一年、NHKブックス）を自身のデビュー作と称していた。じつは、パーリヤ族の焼畑を目の当たりにして発表した『インド高原の未開人』（古今書院）の刊行は、『稲作以前』より三年早い一九六八年である。また、提出するのに京大までリアカーで運んだとまで噂される佐々木の大部の博士論文にもとづき、『熱帯の焼畑』（古今書院）が刊行されたのもその前年であった。しかし佐々木にとって、農耕文化論を軸にして日本文化の多層構造を、広い地理的視野と諸学の成果の統合から、歴史的に復元しようとした佐々木学の出発点こそ、『稲作以前』であったのだろう。



佐々木高明元館長。インドネシア、バタク人の稲田にて。1991年。撮影・吉本忍

佐藤洋一郎 京都産業大学教授

松山利夫 民博名誉教授

石毛直道 民博元館長

石毛が振り返るように、縄文時代に農耕はなく、大陸伝来の水田稲作を基盤にした単一の農耕文化が弥生時代以降に列島を覆い尽くしたという、かつてのいわば日本単一農耕文化論に、佐々木は疑義を呈した。戦後まもなく熊本県の五木村や北陸の白山麓で焼畑と生活文化を調査し、水稲耕作開始以前の農耕文化が地域ごとに多様であったことを、佐々木は『稲作以前』や『日本の焼畑』（一九七二年、古今書院）で明言した。松山によると、一九六〇年代半ばに日本の「農林業センサス」から焼畑の項目が削除されてから、つまり正式な統計から日本の焼畑が消滅する最後期に佐々木は調査したことになる。栽培作物から日本の焼畑の類型化を試みた学者は、後にも先にも佐々木しかいない。この孤高の業績が、大学紛争で全共闘の学生たちへの真摯な対応におわれながら、書きすすめられていた。

稲作はどこから？

大陸アジアの照葉樹林帯では、焼畑による雑穀・根菜栽培が山地斜面や丘陵における典型的な農耕形態である。これが西日本の農耕文化と連なるという佐々木の着眼は、「照葉樹林文化論」の実証的検討をとおして深化された。上記タイプの焼畑耕作にくわえて、ドングリなどの堅果類を水さらしによってあく抜きする技法、茶の加工と飲用、絹の製造、漆の利用、麹を使う酒の醸造、ジャポニカ種の米の卓越、モチ種の穀類の創出、味噌や納豆のような豆類の発酵食品、コンニャクやナレズシの製造、野蚕の文化、神の死体から作物が生まれたとする死体化成型の作物起源神話をはじめとする口頭伝承、歌垣その他、特色ある有形・無形の多種多様な文化複合が照葉樹林帯に見られることが、次第に明らかになる。ちょうど一九六〇年代から八〇年代当時は、アジアの栽培稲の起源地として照葉樹林帯の「中国雲南・アッサム」説が有力であったから、日本の文化的ルーツを探る議論として、世間からも注目を浴びた。

この照葉樹林文化論に多大な刺激を受け、遺伝学・考古学の立場から稲作の起源地を追求してきたのが佐藤である。一九八〇年代に雲南・アッサムから一〇〇〇キロメートル以上も東に離れた長江中・下流域でもっと古い六〇〇〇年以上前の稲作遺跡が発掘され、稲作起源地は訂正された。佐藤によると、この結論を『日本文化の起源――民族学と遺伝学の対話』（一九九三年、講談社）のなかで発表するとき、照葉樹林文化論の核でもある稲を失う打撃であったにもかかわらず、佐々木のことばは「専門家がそういうんやったらそうやろ」。むしろ研究の進展を喜んだ。その後『DNAが語る稲作文明』（一九九六年、NHKブックス）で佐藤が、インディカとジャポニカと二系統ある稲のうちジャポニカの起源は長江であると書いたとき、佐々木は「わかったのは半分か」と言い、探究心にとどまるところなかった。

京都学派の伝統

照葉樹林文化論の理論構築にあたっては、「京都学派」と通称される今西錦司を中心とする研究グループの存在が重要であった。一九五〇年代から毎週開かれた研究会には、梅棹忠夫、中尾佐助、上山春平、川喜田二郎、石毛直道ほか、そうそうたる個性的メンバーが参加し、文理融合の学際的議論を展開した。京都学派の徹底した現地主義、そして異分野の人と協同してひとつの問題に取り組む学問姿勢が佐々木学の骨髄となったが、それは佐藤にも受け継がれた。

民博創設期以降の佐々木は、梅棹のアイディアを実現するため、館の組織作りや館外諸機関との折衝など実務を有能にこなすリアリストとして立ち回った。そのいっぽう、自宅の庭に咲いた花を館長室の花瓶に生けるロマンチストでもあった、と石毛は語る。庭にはアワ、シコクビエまで植わっていたそうだ。『稲作以前』に始まる文明論のロマンチシズムは、最後まで庭にはぐくまれていた。

イネの栽培化のはじまり

那須浩郎　総合研究大学院大学助教

「雲南―アッサム地域」から「長江中・下流域」へ

『稲作以前』が発表された当時、イネ*Oryza sativa*の栽培起源地は、「雲南―アッサム地域」であると考えられていた。この地域がイネ品種の多様性の中心だったからである。しかし最古の稲作の証拠は四〇〇〇年前ごろのものしかなかった。一方、中国考古学の成果から長江中・下流域で九～七〇〇〇年前ごろの古い炭化米が見つかって、こちらが稲作（ジャポニカ群*O. sativa* "Japonica"）の起源地であると考えられるようになった。

古代米（赤米）の水田（菊地有希子氏による実験水田）。背が高く、芒（のぎ）が長いのが特徴

しかし、これらの炭化米のすべてが栽培種だったかどうかは、依然として議論が続いている。炭化米の形態だけでは栽培種と野生種を識別することが困難で、籾の脱粒性（脱落性）に着目する必要があるからだ。成熟した稲穂が頭を垂れるように、栽培種では、成熟しても籾が穂軸から脱粒しにくくなっている。一方、野生種は、成熟すると籾が穂軸から自然に脱粒する。この形質は、栽培種と野生種を識別するのに有効であり、遺跡から出土する籾の基部にある「脱粒痕」を調べることで検証可能である。

脱粒痕から栽培化を検討すると、栽培型の形質が出現するのは、七九〇〇年前ごろの浙江省跨湖橋遺跡が最古となる。しかしこのころはまだ、栽培型の脱粒痕よりも野生型の方が多く出土している。その後、六六〇〇年前ごろの浙江省田螺山遺跡では、栽培型が野生型よりも多くなる。イネが栽培化されてから非脱粒性の形質が定着するまでには、数千年の時間を要した可能性があり、栽培化が起きた当初は、非脱粒性のイネばかりを選んで栽培していたわけではなかったようである。

六四〇〇～五五〇〇年前ごろになると長江中流域の湖南省城頭山遺跡や長江下流域の江蘇省草鞋山遺跡などで水田が見つかるようになり、このころに、稲作農耕を基盤に置いた社会が定着した。特に城頭山遺跡では、黄河流域で発達してきた雑穀のアワ栽培も取り入れており、水田が利用されるようになるころには、アワやエゴマなどの畑作物の栽培も同時におこなわれていたことがわかってきた。

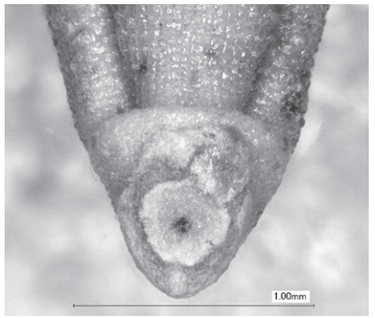
成熟した古代米の稲穂

珠江流域起源説は本当か？

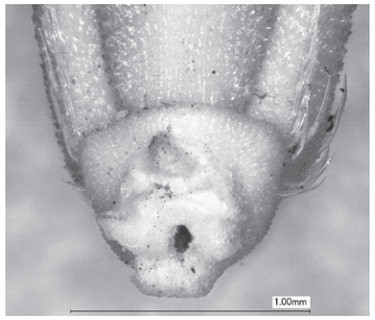
一方、遺伝学の方からは、最近、珠江流域が起源地であるという説が著名な科学雑誌『Nature』に出された。この研究は、広西チワン族自治区の珠江中流域に生息している野生イネが、ジャポニカ群にもっとも近縁であることを、大量の現生イネの遺伝学データにより示したものである。しかし、この結果は珠江流域が必ずしも栽培起源地であることを意味しない。なぜなら、栽培化が起きた当時の野生イネの分布は、現在の分布とは異なるからである。当時は現在よりも温暖であり、かつ人為的な開発の影響が少なかったので、野生イネは現在よりも北方の淮河流域付近まで広がっていたと推定されている。栽培化にかかわった野生イネ集団は、おそらく、当時長江流域から淮河流域に分布していた集団であり、それらは現在絶滅している。現在の野生イネ集団の遺伝情報をいくら大量に高精度に調べても、過去の分布域を考慮する歴史的視点がなければ、栽培稲の起源地を特定することはできないだろう。

日本への稲作の伝播

日本における「信頼できる」イネの考古学的証拠は、弥生時代早期（紀元前一〇世紀ごろ）のものである。これまでに報告されてきた、縄文時代前期～後期のイネのプラント・オパール（植物珪酸体）などによる証拠は、どれも年代や種同定に疑問符がつけられており、洗い直しが進められている。雑穀のアワとキビもイネとほぼ同時期に渡来したと見られるが、縄文時代における確実な証拠はまだ無い。その一方で、縄文時代中期ごろから、ダイズやアズキが栽培されていたことがわかってきた。「水田稲作が伝来する以前の縄文時代には、非稲作（畑作）農耕とそれに伴う文化が定着していた」という佐々木先生の考えは、陸稲や雑穀ではなかったが、マメの栽培によって証明されている。



野生イネ*Oryza rufipogon*の籾基部にある脱粒痕。中央の維管束（いかんそく）のとおる穴が小さく、円形でスムースな形状になっている



栽培イネ*Oryza sativa*の籾基部にある脱粒痕。中央の維管束のとおる穴は大きく、不規則な形状になっている

湖南省城頭山遺跡から出土した約6400年前ごろの炭化した籾の基部。維管束の穴が大きく、栽培型の脱粒痕を示す

「水田文化」という視座

安室知　神奈川大学大学院教授

稲作単一文化からの脱却

一九七〇年代後半、日本の農耕文化研究は大きな曲がり角に来ていた。広義の歴史学分野において、稲作単一文化から多元的世界観への展開が一気に進んだ。その立役者が、文献史学なら「百姓」の見直しをおこなった網野善彦、民俗学なら「餅なし正月」伝承から畑作文化類型を発想した坪井洋文、そして考古学・人類学では佐々木高明であった。しかし、稲作単一文化論以降の多元的世界をいかに描くかというところでは、必ずしも三者の思惑は一致していなかった。

たとえば、坪井洋文は、多元的世界観の解明を目指して、まずは畑作文化に焦点を絞って、一九八一年に国立歴史民俗博物館において共同研究「畑作農村の民俗誌的研究」を立ち上げる。そこで坪井の目指した多元的世界の構図は、稲作民的世界・畑作民的世界・漁撈民的世界・都市民的世界の併存する民俗社会であるが、それに対して、共同研究メンバーのひとりである佐々木は明らかに否定的な立場をとっていた。佐々木はこの共同研究のキーワードとなっていた「畑作農耕文化」ではなく、畑作に限定しない「非稲作文化」または「山

民文化」（佐々木、一九八八）という用語を用いて山の暮らしを表現したことは示唆的である。後に、佐々木は日本の農耕文化の構図が、多元的であるとともに、多重的であることにその特徴を見出すようになる。こうした多元的かつ多重的な世界観は、稲作にしろ、畑作にしろ、単一の生業に基づいた議論では限界を迎えることは必然であった。

佐々木らの活躍で、研究対象としての稲作および稲作文化は相対化されたといってよい。しかし、その一方で、農耕文化研究の中心的課題である稲作文化研究は稲作の起源やイネのルーツといったことばかりに目を奪われてゆく。そうした研究姿勢では、多元的・多重的なステージから、稲作へと特化してゆく過程についての研究は等閑視されてきた。むしろ、なぜ・どのようにして日本は稲作に文化的・経済的に特化していったのか、そのプロセスにこそ日本の農耕文化史上の特色を見出だすべきであろう。

田芋の水田タームーなどとよばれ、おもに南西諸島で栽培される（奄美大島）

アゼマメの栽培風景。アゼにはおもにダイズが植えられる（中国浙江省）

多生業の場としての水田

そこで登場するのが「水田文化」という考え方である。水田文化という視座は多元的・多重的世界から稲作へと収斂するプロセスを解明しようとするものである。稲作が水田という場をえて、内なる多様性を獲得してゆくプロセスとして、それはとらえることができる。その内なる多様性のひとつが、水田を他生業の場として活用する発想であり、具体的には水田漁撈や水田狩猟であり、また二毛作やアゼマメ（畦豆）といった水田畑作である。

さらには、稲作という人間側からの利用のあり方ではなく、水田という環境に光を当てることで、生物の生息環境という側面がより鮮明となる。そうすることであらたな問題設定が可能となり、人文・社会科学と生物学など自然科学との接点にあるあらたな研究領域が浮かび上がってくる。一九九〇年代以降、ワイズ・ユース（賢明な利用）、サステイナビリティー（持続可能性）、生物多様性といった環境思想の市民化・大衆化の流れのなか、たとえば棚田や里山のような水田環境は再評価され注目を浴びてきている。そうしたとき、広義の歴史学分野においても、「稲作」から離れ「水田」という視点から日本また東アジアの歴史を見直してみることが、現在的課題に対応しうる歴史学を目指すには不可欠なものとなってきている。

ため池での魚伏籠漁。かつては秋になるとため池の清掃を兼ねておこなわれたが、現在は地域振興のイベントとなっている（宮崎県木城町）

からっぽな手
――戦後秋田の『農民詩集』から

藤原辰史　京都大学准教授

農林一七号

「ひりひりと割れていく農林十七号の青田だ」。このような光景から始まる「形成期の雨」という詩は、一九五五年七月に新評論社から出版された『農民詩集』に掲載されている。『農民詩集』は、秋田の作家・伊藤永之介を編者に据えたもので、「北方自由詩人集団」という秋田の詩人グループの詩が収められている。この同人たちの多くはみずから村で仕事をしながら詩を書き、詩誌『処女地帯』を活躍の場としていた。

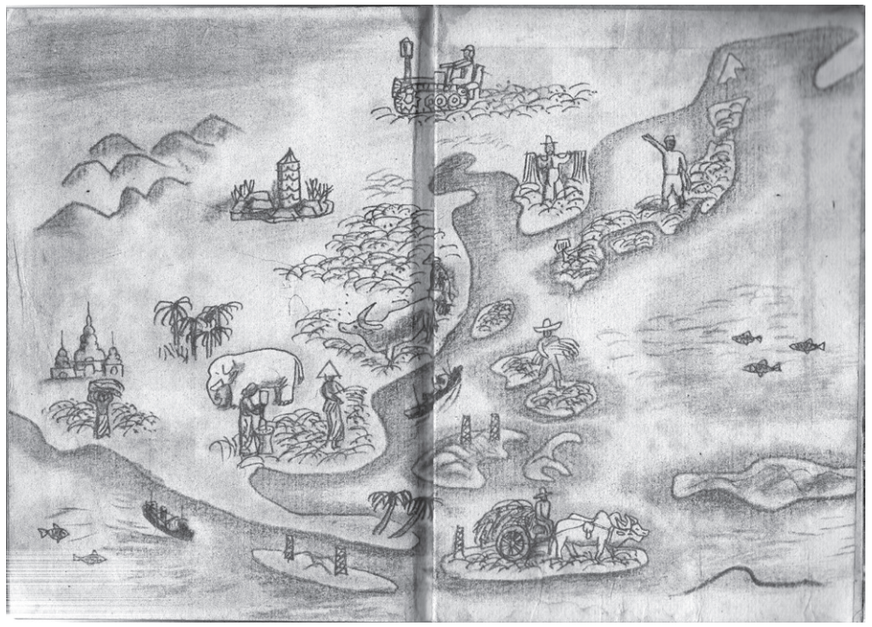
米作単作地帯が広がる秋田県には、戦前に国立農事試験場の支場が設置された。稲の祭祀を司る天皇を頂点とし、対外膨張を進める「米作民族」の国にとって、良質な米の増産技術の開発・普及は国是であった。この支場も、東北のみならず植民地朝鮮にも普及した戦前・戦中のスター品種「陸羽一三二号」を生み出し、帝国規模の米の自給に貢献した。しかしその一方で農民たちは、戦後においてもなお、農閑期には北海道で雇いの漁師をしたり、日本各地の水力発電所の工事に従事したり、若い娘を東海地方に女工として送り出したりして、なんとか食いつないでいた。

「形成期の雨」の冒頭の「農林一七号」は、宮城県立農事試験場で、西日本の有力種であった「旭」と東北の有力種であった「亀ノ尾」を交配して育成された「東北二五号」のことである。一九四〇年より国立農事試験場が推奨する水稲品種として、「農林」系統に登録された。手持ちのデータによれば、一九四五年に三万五七〇〇ヘクタール、一九五五年には八万五二〇〇ヘクタール、全国で栽培されていたというから、一九三七年に二三万ヘクタールを超えた「陸羽一三二号」と比較すれば見劣りするものの、それでも普及に成功した品種といってよいだろう。

世界的な科学技術の結晶

おそらくみずからも農民である高橋重行によって書かれた「形成期の雨」は、日

秋田を代表する農民作家・伊藤永之介が編集した『農民詩集』（新評論、1955年7月）。小学生や中学生の詩も収められている


「稲の大東亜共栄圏」のイメージ。植民地朝鮮で育種学者として活躍した永井荷風の弟、永井威三郎『日本の米』（大日本雄弁会講談社、1943年1月）の裏表紙の絵

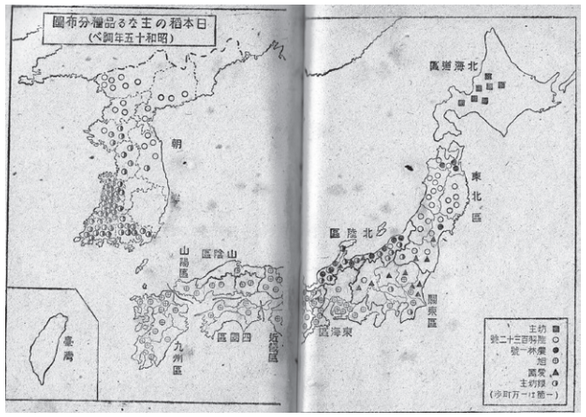
照りで苦しむ農夫たちが雨乞いを始め、やっと念願の雨が降ってきて歓喜に酔うが、その直後に悲劇的な収斂を迎える。「だが、あめ　あめ　サタンのあめだ／放射能からあめがふってどうなるというのだ／農夫の顔は蒼ざめていく」。この放射能は、一九五四年三月一日にアメリカによっておこなわれた世界初の水爆実験が世界中に降らせたものにほかならない。実験が農作物にもたらす不安は、この『農民詩集』のいたるところに登場する。

だが、この詩にはもうひとつの世界的な科学技術の結晶について記されている。それが「農林一七号」に代表される育種技術だ。「からっぽな手」と題された仲野谷清の詩にはこうある。「しょうれい品種とやらいうやつは／肥料をうんとくれれば／大収穫さ／［一行アキ］／そう思って百姓は胸算用し／肥料代を借金した」。

呪縛とあがき

帝国日本が東北のみならず朝鮮でも奨励した「陸羽一三二号」も窒素肥料の反応が強い品種であった。このような奨励品種を導入したら最後、肥料代の借金から逃れられない、というシステムをこの詩は明示している。このシステムは、もちろん、イギリス、アメリカ、ドイツおよび日本の合成窒素肥料企業が一九二〇年代から地球規模で展開しはじめるのと軌を一にしていた。

水爆の放射能にせよ、合成窒素肥料にせよ、あるいは放射線を当てて遺伝子を変化させた品種にせよ、秋田の農夫たちには作れない疎遠なものであるにもかかわらず、その人びとを呪縛し、場合によっては手を「からっぽ」にさえする。その逃れえないものからのあがきが『農民詩集』においてようやくことばになっているのである。



帝国日本における水稲品種の分布図（1940年）。陸羽132号が朝鮮半島北部で普及していることがわかる（永井威三郎『日本の米』大日本雄弁会講談社、1943年1月、86－87頁）

米食悲願民族の食卓

原田信男　国士舘大学教授

白ご飯の食事

日本人は米食民族だといわれるが、実際に腹一杯、白米の飯を食べられるようになったのは、ほぼこの五〇年間のことである。米の生産量は、一九五九年に過去最高の一二五〇万トンに達して、以後も増え続け、一九六七年に史上最高の一四四五万トンを記録した。ところが、これと軌を一にして、食生活の洋風化が進み、米食偏重の是正が

酒と同じ原理の甘味調味料みりん。米を中心とした味覚体系（提供・九重味淋株式会社）

日本独自のカレーライス。やはり基本となるのは米飯である
（『別冊淡交No.17 日本の料理』淡交社、1996年より転載。撮影・岡崎良一）

江戸時代に流行した会席料理。量は別として、ここでも米飯が欠かせない
（『別冊淡交No.17 日本の料理』淡交社、1996年より転載。撮影・小林庸浩）

叫ばれ、逆に消費量は、一九六二年をピークに減少の一途をたどり、米余り現象を惹き起こした。

これを承けて政府は、いわゆる減反政策を採用したことから、米の増産を目指して、まさに粒々辛苦の努力を重ねてきた稲作農民は、大きな転換を迫られた。しかも高度経済成長期には、膨大な工場群が、長年かかって築き上げてきた水田を潰して建てられ、しかも労働力は、その稲作農家から供給されるようになった。こうした状況のなかで、米食を中心とした食文化は、急激な変貌を遂げるに至ったのである。現在のわたしたちの食卓を見回してみても、米の食事に占める位置は、過去に較べて相対的に低くなっている。

しかし日本人にとって、米抜きの食事は考えられない。何らかの事情で稲作が不可能となり、米に代わる優秀な食料が安価に流通すれば別だが、フランスやドイツ・イギリスの食卓からパンが消えることを想定するのが難しいのと同じである。食生活史上の問題で、もっとも厄介なのは、階級差とハレとケの問題である。日本料理を代表する懐石料理にしても米の占める位置は低く、洋食のディナーにおけるパンも同様だろう。ただ、どんな豪勢な料理にも、米の飯やパンが伴わないと、それぞれに物足りない。逆に米やパンのみで食事が成り立つわけでもない。

米の味覚体系

ただ麦の文化が麦の味覚体系によって成り立っているように、米の文化も米の味覚体系によって成り立っている。調味料の味噌・醤油も米麹による発酵食品で、酒や酢にも米は欠かせない。さらに嗜好品に至れば、ほとんどの和菓子には米粉が使われているし、煎餅などは米そのものである。また米文化圏では、米から造った酒が最上品として扱われる。わたしたちの食文化は、主食としての米だけでなく、味覚の体系として米に寄り添った形で形成されている。わたしたちの食事の背景にある食文化は、米という味覚の体系によって成り立っているのであり、その急激な転換は起こりにくい。

食という文化体系は、新しいものを食べてみたい、味わってみたいという革新的な側面もあるが、基本的には強い保守性の上に形成されている。カール・マルクスは、五感は世界史の所産であると見なしたが、わたしたちの味覚そのものも日本人の歴史の上に成り立っている。日本人のＤＮＡという概念は成立しないと考えるが、日本の歴史が創りあげた味覚の体系は、それを構成してきた人びとのあいだに確かに存在する。そして多くの人びとが充分に口にできたかは別として、その中核に米が存在した。

農学者・渡部忠世先生のことばを借りれば、日本人は米食悲願民族であり、現在において悲願が実現したからといって、その歴史は簡単に変わることはあるまい。ただ相対的に食生活に占める米の位置が低下することは避けられないし、パンや麺類が日常の食事により多く入り込んでくることは事実だろう。しかし形は多少変えたとしても、二〇〇〇年におよぶ米食の歴史は、半永久的に受け継がれ続けるものと想われる。

似たモノ さがし

似てるけどどこか違う
似てないようでどこか似てる
いろんな工夫や思いを映す
みんぱくの所蔵資料

みんぱくのマドンナたち

古沢（ふるさわ） ゆりあ　総合研究大学院大学 文化科学研究科 博士課程

今月はクリスマスの時期ということもあり、世界各地のマリア様の像をみてみよう。「似たモノ」というか、そもそも同じ人物の像なのだが、時代や地域によってじつに多様な表現がある。

まず、古くからの伝統を受け継ぐのが、イコンとよばれる東方教会の聖像画である。古色を帯びたブルガリアのイコンには、聖母子と聖人たちが描かれている❽。

一方、マリアが人びとの前に出現したとされる出来事があると、目撃者の証言にもとづき新しいマリア像が生まれる。フランスのルルドでの出現（一八五八年）による「ルルドの聖母」は、このハンガリーの小像のように、今では世界中でカトリックの人びとに崇敬されている❷。

土地と結びつき、特定の人びとの信心をとりわけ集めるマリア像もある。ビデオテーク映像「黒いマリアの巡礼」では、フランス中部オルシバル村の黒いマリアをマヌーシュ（ジプシー）の人びとが訪れる❻。川で漁師の網から発見されたという伝承をもち、ブラジルの国の守護聖人となったのは、「アパレシーダの聖母」だ❾。

身につけて持ち運べるマリア像もある。韓国のキーホルダーでは、幼子イエスを抱くマリアはチマチョゴリをまとった韓国人の姿であり❸、フィリピンのお守りには、ルソン島南部ナガに三百年伝わる「ペニャフランシアの聖母」の姿が鋳られている❶。これらには、マリアをいつも自分たちの身近な存在として感じたいという願いが見てとれる。

麦藁（むぎわら）細工のメキシコの聖母像から❿、細かい文様の彫られた木の十字架のなかに描かれたエチオピアの聖母子まで❼、それぞれの土地の素材や技法を用い、人びとの想像力／創造力を反映してさまざまなマリア像が生まれてきた。

なお、クリスマスの時期（待降節から公現祭まで）、キリスト教徒の家庭や学校、お店などでは、キリスト降誕の場面の人形が飾られる。これらイタリアとグアテマラの作例のかわいらしいマリア像は❹❺、飼葉桶（おけ）の幼子イエス、父ヨセフ、東方の三賢王などの登場人物たちとともに降誕場面を構成する人形のひとつである。

❶お守り、フィリピン、縦 4.9 × 横 3.2 × 厚さ 0.7cm、H0224687
現地ではアンティン・アンティンとよばれる

❷聖母マリア像、ハンガリー、
幅 4.7 × 高さ 16 × 奥行 3.8cm、H0161301

❸聖母子像のキーホルダー、
大韓民国、縦 12 × 横 5.3 × 厚さ 0.4cm、H0214343

❹クリスマス人形（キリスト降誕）、グアテマラ、
幅 6.6 × 高さ 18 × 奥行 5.5cm、H0193578

❺クリスマス人形（キリスト降誕）、イタリア、
幅 5.8 × 高さ 12 × 奥行 4.1cm、H0103545

❻「黒いマリアの巡礼」、フランス、
ビデオテーク番組番号 7178

❼十字架、エチオピア、
縦 33 × 横 15 × 厚さ 1.8cm、H0175059
蓋を開けるとイコンが描かれている

❽イコン「聖母とキリスト」、ブルガリア、
縦 40 × 横 28 × 厚さ 5cm、H0064463

❾アパレシーダの聖母像、ブラジル、
幅 24 × 高さ 44 × 奥行 10.5cm、H0268819

❿聖母マリアの麦藁細工、メキシコ、
幅 30 × 高さ 40 × 厚さ 5.8cm、H0155010

※寸法は計測時の最大値を示す。

年末年始展示イベント「うま」

2014年の干支である「うま」をテーマに、みんぱく所蔵の資料や写真を展示し、世界各地の「うま」にかかわる興味深い情報をご紹介いたします。展示場内の「うま」にかかわる資料の場所を示した「うまマップ」もお配りします。年末年始、世界の人びとと「うま」のつながりを探ってみませんか?

会期　12月12日（木）～2014年1月28日（火）
会場　本館　探究ひろば横休憩所

■関連イベント

◆ギャラリートーク
日時　1月13日（月・祝）
11時～11時20分／14時30分～14時50分
解説　小林繁樹（本館教授）
会場　本館　探究ひろば横休憩所
※申込不要、参加無料

◆ワークショップ
「大きな「うま」ジグソーパズルに挑戦!」
みんぱくの展示資料を使った絵柄のジグソーパズルを難易度の高いものと低いもの2種類ご用意しています。参加者には「うま」にまつわる情報シートをお配りします。
日時　1月13日（月・祝）、1月19日（日）
10時30分～16時30分（受付16時終了）
会場　エントランスホール
※当日受付、先着順、参加無料
※6歳未満の方は保護者同伴で参加してください

「おりがみで遊ぼう!――干支シリーズ「午」」
日時　1月13日（月・祝）
10時／10時45分／11時30分／13時／13時45分／14時30分（各回40分）
会場　エントランスホール（定員各回10名）
※当日受付、先着順、参加無料

「えとの「午」で絵馬をつくろう」
日時　1月26日（日）10時30分～16時
会場　エントランスホール（定員100名）
※当日受付、先着順、参加無料

特別展

「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館――Attic Museum」
会期　12月3日（火）まで
会場　特別展示館

国際研究フォーラム
「ロシアと中国の国境――諸民族の混住する社会における『戦略的パートナーシップ』とは何か?」
中国東北部を対象に、諸民族関係を考察する鍵概念として、「戦略的パートナーシップ」をとりあげて、議論します。
日時　1月8日（水）10時30分～17時30分
1月9日（木）10時～16時30分
会場　本館　第4セミナー室
※要事前申込、研究者対象
申込・お問い合わせ先
小長谷研究室
電話（直通）06・6878・8274

国際シンポジウム
「北太平洋沿岸諸文化の比較研究――先住権と海洋資源の利用を中心に」
本シンポジウムの目的は、北太平洋沿岸諸文化に関する研究のこれまでの成果と調査の現状を比較検討し、研究のためのネットワークを形成することです。
日時　1月11日（土）～1月13日（月・祝）
会場　本館　第4セミナー室（各回定員80名）
※申込不要、先着順、参加無料

みんぱく映画会／みんぱくワールドシネマ
「ラビット・ホール」
交通事故で息子をなくした家族の和解と再生を描いた映画を通して、家族のあり方をあらためて考えるきっかけにしてください。
日時　1月25日（土）13時30分～16時
会場　講堂（定員450名）
※申込不要、先着順、参加無料
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

●朝倉敏夫教授が韓国政府より大韓民国玉冠文化勲章受章
10月19日、本館文化資源研究センター朝倉敏夫教授が、多年にわたる韓国社会の文化人類学的研究、および国立民族学博物館において日韓間の人的交流、文化交流に果たした功績を称えられ、韓国政府より大韓民国玉冠文化勲章を受章しました。

●藤本透子助教が人間文化研究奨励賞受賞
本館民族文化研究部藤本透子助教が、人間文化研究奨励賞を受賞しました。

●展示場リニューアル工事のお知らせ
展示場リニューアル工事のため、朝鮮半島の文化・中国地域の文化・日本の文化（沖縄のくらし）が閉鎖されます。
期間　3月19日（水）まで

●展示場一部閉鎖のお知らせ
本館2階展示場の空調設備更新のため、左記の期間、展示場の一部閉鎖をいたします。その間は観覧無料となります（ただし自然文化園（有料区域）を通行される場合は、入園料が必要です）。ご理解とご協力をお願いします。
1. 12月5日(木)～2014年1月22日(水)
音楽の一部、言語、南アジア、東南アジア、中央・北アジア、アイヌの文化、日本の文化、ナビひろば、休憩所が閉鎖されます。
2. 2014年1月23日(木)～2月19日(水)
オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、音楽の一部が閉鎖されます。

●休館日のお知らせ
年末年始は12月28日（土）から1月4日（土）まで休館します。
※各イベントについてくわしくはホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時から17時（土日祝を除く）です。

刊行物紹介

■信田敏宏　著
『ドリアン王国探訪記――マレーシア先住民の生きる世界（フィールドワーク選書）』

臨川書店　定価：2,100円
フィールドワークの魅力とは何か。マレーシア先住民オラン・アスリと暮らした2年半の日々を振り返りながら、自己をも変容させるフィールドワークの魔力や醍醐味を、村びととのエピソードや豊富な写真を交えて紹介します。

■田村克己、松田正彦　編著
『ミャンマーを知るための60章』
明石書店　定価:2,100円

今、世界の注目を集めているミャンマー。それぞれの分野でミャンマーに長く関わってきた専門家や、日本に留学や仕事で長く滞在しているミャンマー人執筆者が、その経験と知識を背景に、さまざまな視点からこの国を紹介します。

みんぱくホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/　　みんぱくフェイスブック　http://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　http://twitter.com/MINPAKUofficial　　電話でのお問い合わせ　06-6878-8560（本館 広報係）

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料

第427回　12月21日(土)
カザフの死者儀礼――日常から展望するイスラーム
講師　藤本透子（国立民族学博物館 助教）

大規模な死者儀礼の一場面

死者のためにクルアーン（コーラン）を唱え、盛大な肉料理でお客をもてなし、馬上競技に熱くなる。カザフ人にとってのイスラーム（イスラム教）は、私たちが想像するイスラームとは少し異なります。マスメディアで「厳格」「過激」というイメージが先行しがちなイスラームについて、カザフスタンの草原に暮らす人びとの日常から考えます。

第428回　1月18日(土)
熱狂エチオジャズ!!!
講師　川瀬 慈（国立民族学博物館 助教）

アジスアベバのジャズ・ファンクバンド

エチオピアでは、50年代から70年代にかけて、皇帝ハイレセラシエの護衛楽団がエチオピア特有のメロディと西洋のポピュラー音楽を絶妙にブレンドさせながら独自の音楽世界を発展させました。本ゼミナールでは、現在各国の音楽シーンで話題沸騰の〝エチオジャズ〟の歴史とその世界的な広がり、音楽家たちの素顔を紹介します。

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　国立民族学博物館 第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）

第427回　2014年1月11日（土）14時～15時
【みんぱくコレクションを語る】
中央アジアの民家の現在
講師　藤本透子（国立民族学博物館 助教）
この夏、ウズベキスタンとカザフスタンで収集を含む調査をおこないました。現在、展示場にあるウズベクの民家模型は1980年代に制作されたものですが、そのモデルとなった民家を訪ね、現在のくらしの様子などをうかがいました。カザフでは天幕の役割が、住まいから別の役割に変化していることが分かりました。収集した資料も実際にお見せしながら、今回の調査や今後の調査計画もあわせてお話しします。

第428回　2月1日（土）14時～15時
神殿更新で社会が変わる――南米アンデス文明の誕生
講師　関雄二（国立民族学博物館 教授）

東京講演会
会場　モンベル品川店2Fサロン
定員　60名（要事前申込）

第107回　12月21日（土）14時～15時30分
【ビデオテークより】
婚礼に映しだされるインドのいま
講師　三尾稔（国立民族学博物館 准教授）
盛大なことで知られるインドの婚礼は、経済発展を背景にますます華麗におこなわれるようになっています。婚礼にうつしだされるインド社会の現在の姿はどのようなものでしょうか。また婚礼にかける人びとの思いはどのようなものでしょうか。インド西部のラージャスターン州で2012年に行った取材に基づくビデオテーク映像の一部をお見せしながら、インドの婚礼の変わりつつある部分と変わらない部分について考えたいと思います。
※申込は参加者名、連絡先を明記して上記友の会までメール、FAX、ハガキにて。

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

アフガニスタンの女性たちの手仕事

長年にわたる紛争がいまもなお続く、アフガニスタンの女性の生活と自立の支援をめざして、2006年に日本人女性がシルクロード・バーミヤン・ハンディクラフトを設立しました。
アフガニスタンの女性は手先が器用で、母は娘と一緒に絨毯を織り、身の回りの品に手の込んだ美しい刺繍をほどこし、娘が嫁ぐ日のための準備をしています。刺繍は家族の心をつなぐ文化なのです。
そんな彼女たちが一針ごとに思いを込めて刺繍をほどこした手工芸品が届きました。バッグやポーチ、民族衣装を身にまとったテディベアもあります。失われつつある伝統文化を次世代に継承し、自分たちの力で未来を切り開いていくことをめざす、アフガン女性の手仕事を応援しませんか。

手織り布のポーチ（写真左）	2,400円
手織り布の丸ポーチ（写真右）	2,400円
パッチワークのお財布兼バッグ（写真中央）	8,000円
民族衣装を着たテディベア	4,300～5,000円

※掲載商品以外にもたくさん取り揃えております。

価格はすべて税込

地球ミュージアム紀行

北アリゾナ博物館

米国フォー・コーナーズ地域には、先住民に対する友愛と敬意に満ちた活動を続けてきた私設博物館がある。文化展示、アート振興、資料保存における博物館と先住民との連携は、協働を声高に謳うことなく日常化している。

伊藤敦規
民博 研究戦略センター

コロラド高原地域の自然史と先住民文化の展示・研究施設

米国五〇州のなかで四州の境界線が一点で交わるのは、南西部のユタ、コロラド、ニューメキシコ、アリゾナだけである。「田舎町」をあらわす一般名詞「フォー・コーナーズ」は、これら四州の交差地点や四州の総称として固有名詞で用いられることもある。その中心部はコロラド高原で、世界遺産グランドキャニオン、大隕石孔（いんせきこう）メテオ・クレーター、西部劇の舞台として有名なモニュメントバレーなどの国立・国定公園指定の自然遺産が散在する。

北アリゾナ博物館（Museum of Northern Arizona、以下ＭＮＡ）は、フォー・コーナーズ地点の南西に位置するフラッグスタッフ市に一九二八年に開館した。おもな収蔵・展示品は、コロラド高原に生息する動植物や恐竜などの自然史関連の資料と、ホピやナバホやズニといった先住民関連の考古学資料と民族誌資料である。ＭＮＡは、世界中から観光客を呼び寄せる魅惑の地を紹介する文化施設であり、（古）生物学・考古学・文化人類学専門の常勤スタッフを有する研究機関でもある。

先住民アートの普及促進

開館当時の一九二〇年代、米国連邦政府は先住民に対して強権的な政策を続けていた。宗教・教育・土地所有などにおいて伝統的な先住民文化を解体させ、強制的な白人社会への同化がねらいだった。強制同化政策は一九三〇年代に自治・経済自立政策へと大転換する。新政策「インディアン・ニューディール」は、連邦政府の管理下での先住民政府樹立、成文憲法の制定、経済活動の支援などを主眼とした。たとえば米国内務省に新設した「インディアン美術工芸委員会（ＩＡＣＢ）」は、先住民アートの観光資源化の可能性に着眼し「民族集団ブランド」の開発と促進を図った。

ＭＮＡは強制同化政策時代から先住民に対して人道主義・友愛主義を貫いてきた。たとえば美術工芸品制作の奨励やプロモーション活動で、ホピ製アートの展示即売会は開館五年目に開始した。そうした経験と貢献を評価したＩＡＣＢは、ホピに独特の銀細工制作技法を考案するようＭＮＡに要請する。第二次世界大戦参戦にともない金属供給が滞ったため計画は頓挫したが、現在ホピ製銀細工と同義語的に使用される重ね合わせ技法はこのときに産声をあげた。その後のホピ銀細工産業の発展や資料収集と記録化においてＭＮＡの貢献は非常に高い。

展示即売会の歴史は現在まで続いている。販売スペースの提供だけではなく、講演、制作・調理実演、パフォーマンスなどに本館の展示場、講堂、中庭施設が開放される。ホピ・フェスティバルは毎年米国独立記念日の週末に開催され、二〇一三年には八〇回目を迎えた。世界でもっとも古くから継続する先住民の総合的文化普及イベントである。

新収蔵施設のオープン

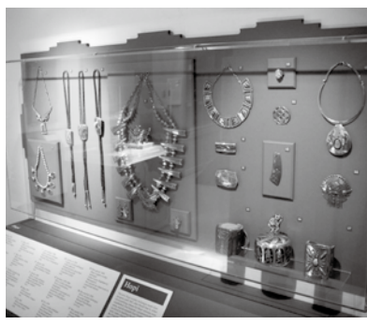
二〇〇九年の夏至、ＭＮＡはイーストン・コレクション・センターの除幕式をおこなった。一九四〇年代末に建築した旧収蔵庫は、資料保存に関する問題が指摘されてきたためだ。敷地面積一六〇〇平方メートルの二階構造の新施設は、安全、清潔、環境への優しさを謳っている。遠くからでも目を引くのは、屋外の天井部に植物が生えていることだろう。防水加工を施した特殊パネルを敷き詰め、苔（こけ）とココナッツ繊維と土壌でパネルを覆い、コロラド高原地域に生息する植物の種をまいて自生させている。「living roof」とよばれるこのシステムのコンセプトは自然との調和である。ＭＮＡ、建築デザイナー、先住民の三者は数年間折衝を繰り返した。交渉団として組織された「先住民諮問委員会」は、自分たち先住民にとっての利便性と快適さや、彼らの伝統や信仰に対する配慮を要望した。たとえば、東に向いた入口、流線型のデザイン、自然界とのつながりが途切れない「生きた建造物」、地元産出建材の使用、資料熟覧のための自然光採光設備、人骨や特定の儀礼具の非保管などである。

ＭＮＡの先住民への姿勢は「これまでもこれからも一緒に文化を継承していくパートナー」というロバート・ブルーニグ現館長の言葉に端的にあらわれている。身近な存在の人びとから資料収集し、それらを展示・保存する研究機関が、過去・現在・未来において示してくれるこうした態度は、わたしたち世界の民族集団の資料を扱う民博の活動にも大いなる示唆を与えてくれると思われる。なお、ＭＮＡと民博とは二〇一三年度中に学術協定を結ぶ予定である。

イーストン・コレクション・センター

ミュージアム・ショップのポスター。先住民スタッフはモデルも務める

第 80 回ホピ・フェスティバルの様子。2013 年 7 月（撮影・山﨑幸治）


ホピの銀細工の歴史を紹介する展示

MNA 本館正門

多文化をあきなう

地域と世界がつながるフェアトレード

土井（ど） ゆきこ　フェアトレード・ショップ風"s（ふ～す）代表・フェアトレード名古屋ネットワーク代表

フェアトレードをまちぐるみで応援するフェアトレード・タウン。
その考え方は、生産地と消費地をつなげるだけでなく、
まちに暮らす人びと同士をつなげ、まち自体を活性化する可能性を秘める。

フェアトレード店開業

わたしは、普通の女の子だった。学力も体力も芸術系も普通、本を読むわけでもなく世界についても無頓着であった。高校を卒業して損保会社に就職、広告会社に転職して寿退社。三人の男の子に恵まれた。末子が二歳のときにパートタイムで働き始めた。その後、女性起業セミナーを受講し、「生涯現役で人の役に立つことをしたい」という思いから一九九六年に愛知県女性総合センター一階に中部地区ではじめてのフェアトレード専門店をオープンした。子育て真っ最中のときに自宅マンションで開催した出前コンサートで、エビやバナナの生産者が貧しい生活を送っていることを聞き、わたしたちの暮らしが東南アジアの人たちを犠牲にして成り立っていることを知ったことも大きい。店を経営しながら、わたしはいろんな人との出会いのなかで成長していった。またフェアトレードの生産者の現場を訪れることで視野を広げることもできた。一〇カ国ほど訪ねたそれらの土地とは今もこころでつながっている。

事業と並行して講演会など啓発活動を企画してきたが、一〇年たってもフェアトレードが広がっているとは思えなかった。じつはそのころ、世界のフェアトレード・タウン運動を知って驚いたのだが、到底名古屋では無理だろうとあきらめて、それ以上考えもしなかった。

生産者を訪ねて

商品を作っている生産者を訪ねることは、見えなかった姿が見えてくるのでわくわくする。訪問前には想像の世界にすぎなかった生産者の姿が、訪問後はいつも隣にいるような錯覚すらあり、顧客にそのことを伝えるのはなんの苦もなく、現地で感じた気持ちは溢（あふ）れるように出てくる。それもまた喜びである。モノを通じて人がつながっている実感がある。二〇〇七年にメキシコの首都から車で六時間離れた陸の孤島とよばれているプエブラ州のケツァーランを訪ねたときは、ちょうどコーヒー生産者のトセパン組合の三〇周年ということでさまざまな祭事があった。教会の広場ではボラドーレスという儀式を見た。教会より高いくらいの支柱の上部に巻きつけた縄に体をつないだ四人の男たちが、鳥になったように支柱をくるくる周りながら舞い降りてくる。それを見たときは、人は天と地のあいだに有り、鳥に憧れているのだと思った。

旅先で訪ねる生産者は、おもに先住の民だ。質素な暮らしで、素朴な音楽や踊りなどが観光化される前の状態で存続している。そして彼らの組合の理念には、地球環境への強い思いがある。その同じ思いで生産者と先進国の消費者がつながるのがフェアトレードである。残念ながらその思いを抱く消費者はまだまだ少ないのが現状であるがゆえに、フェアトレードの理念を伝えるためにも、生産者を訪ね、製品の背景を消費者に伝えていきたい。

フェアトレードは運動だ！

二〇〇八年の秋、東京で開催されたフェアトレード団体の展示会に参加した。そのときに「みんなでフェアトレード・タウンになりたい！」って手をあげようという提案があり、それまで出来ないと思っていたわたしも、手を挙げる事なら出来ると、手を挙げた。すると、そこから蓋が開いたように、次々と情報が入り、翌年三月には「フェアトレード・タウンで町おこし」の講演に参加するために再度上京。名古屋でもフェアトレード・ラベル・ジャパン（FLJ）の中島佳織事務局長をお招きして勉強会を一一月に企画し、それにむけて六月には「名古屋をフェアトレード・タウンにしよう会（なふたうん）」が発足した。フェアトレードは運動であると改めて感じた。

「なふたうん」のおもな活動は、国際理解教育の参加型ワークショップを、学校（小・中・高・大）や生涯学習センターで開催することである。これまでに自主企画の三回連続講座「楽しく学ぶフェアトレード」「チョコレートの来た道」を含め、三年間で七〇回以上もおこなった。講演会やバザー出店も多数ある。毎年五月にはフェアトレード月間企画として、名古屋市・愛知県の国際交流協会と共催でフェアトレード企画を続けている。「なふたうん」の趣旨に賛同してくれたワンコインサポーターは、現在一八〇名にのぼる。月刊で「なふたうん新聞」を発行し、毎月の推進会議には、大学生や会社員、主婦など、職業も年代もさまざまな人が集まっている。

二〇一一年秋から一年かけて、市民・行政・議員・NPO／NGO・学校・企業なども参加して「名古屋にフェアトレードを広めるための会議」を隔月で開催した。その後、他のフェアトレード団体にも呼びかけ、二〇一三年一月「フェアトレード名古屋ネットワーク」がJICA（国際協力機構）中部にて発足した。このネットワークは、フェアトレード・タウンになるための六つの条件のひとつ、推進組織の設立と支持層の拡大に該当する。次に取り組むのは議会承認である。

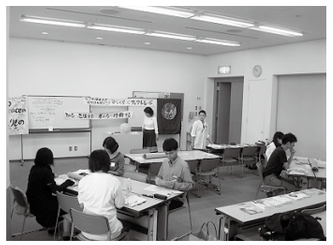
「わたしたちはお陰様で生きている。生かされている」と思い、地域や世界、そして自然とともに生きる思いをもったならわたしたちは平和に暮らせる。そしてフェアトレードは世界に視野を広げるきっかけのひとつであり、各分野の人とつながる縁結びの役もある。二〇一二年一二月に施行された「消費者教育推進法」は、公正で持続可能な社会形成に消費者として積極的に参画することを目指している。まさにフェアトレードの推進がうたわれているともいえよう。この機に、名古屋をフェアトレード・タウンにし、フェアトレードをいっそう推進することを目標にしている。

ろうけつ染めの作業（インドネシア）

生産者とコーヒーの木を植える筆者（2007年、メキシコ）

フェアトレードショップ　風"s（ふ～ず）の店頭

フェアトレード名古屋ネットワーク（FTNN）の発足は2013年1月11日


ワークショップ「楽しく学ぶフェアトレード」も8年目を迎える

フィールドで考える

物理学者のフィールドワーク

中家（なかや） 剛（つよし）　京都大学大学院教授

物理学にとってのフィールド

「フィールド」は物理学で根底にある重要な概念で、「field = 場」である。そして、近代物理学は「場」の概念を導入することで、さまざまな物理現象を説明することに成功した。例えば、電気のある粒子が存在すると周りに電場（electric field）ができ、この電場の方程式を解けば、そこでの粒子の運動がわかる。フィールド（場）ということばは、量子場（quantum field）、場の方程式（field equation）、場の理論（field theory）など、物理学の世界にあふれている。最近の話では、二〇一三年のノーベル物理学賞はヒッグス粒子予言という、ヒッグス場（Higgs field）の理論についてであった。しかし、ここでは物理学のフィールドではなく、我々、素粒子実験物理学者が活動する三つの「フィールド」について紹介しよう。

素粒子と実験装置

わたしは、素粒子のなかで「ニュートリノ」という粒子を研究している。ニュートリノのニックネームは「幽霊粒子」。身の回りにたくさんあり、宇宙のなかで光の次に数多い素粒子だが、なかなか見つけられない。茨城県東海村で直径五〇〇メートルもある大型加速器J―PARCを使ってニュートリノを生成する。次に、二九五キロメートル離れた岐阜県飛騨市神岡町にある、総重量五万トンの大型観測装置「スーパーカミオカンデ」で観察し、ニュートリノの変化を測るのが我々の研究である。大学で講義のないときは、頻繁に東海村か神岡町に出張し、装置を動かし、データを取り、解析する。「第一のフィールド」は装置がある東海と神岡の研究所といえる。

国際共同研究とミーティング時刻

素粒子実験では、世界中の研究者が共同で実験装置を使う「国際共同研究」が日常化している。我々のニュートリノ実験グループには日米加伊英仏露瑞波独西の一二カ国から合計四〇〇名の研究者が参加している。「第二のフィールド」は、これら世界中の研究者との議論の場といえる。どう実験するか、データは取れたか、測定結果は正しいか、それらひとつひとつの情報を世界中の研究者で共有する。このために、今では良く知られたコンピューターネットワーク上のウェブシステムを活用する。知る人ぞ知る、WWW（World-Wide-Web）はヨーロッパの素粒子原子核研究所で一九九一年に誕生した。第二のフィールド「世界中の研究者との共同研究の場」はこうして発展してきた。

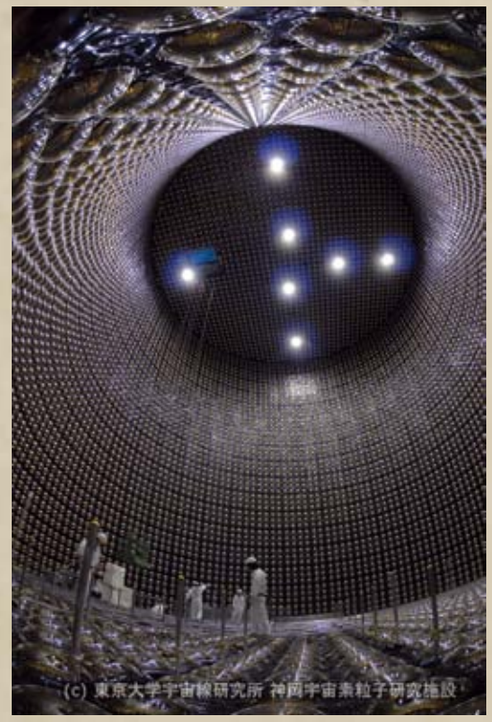
世界中の物理学者がネットをとおし、頻繁に議論を重ねている。そこでは、国境線は無く、異なった文化環境で育った物理学者同士が研究を進めている。ネットをとおし情報は瞬時に世界を駆け巡るが、ひとつ問題があった。「時間」である。国際研究の打ち合わせのため、前述の一二カ国をつなぐ唯一の時間は、なんと日本の夜一〇時。アメリカ西海岸は朝六時で、そこから二三時間のミーティングが始まる。この時間であれば、ハワイを除けば真夜中の国はなく、皆でそろって議論ができるのである。第二のフィールドの時間は、日本では必然的に夜になってしまった。

ニュートリノ研究

二〇一三年七月、我々はあるニュートリノが別のニュートリノに変化する現象を発見した。発見の報は世界を駆け回り、大発見として受け取られた。ニュートリノの種類が変わったことの何がすごいのか？　この発見は、宇宙の物質誕生の謎の解明につながると考えられている。我々の世界がなぜマイナスの電気をもつ電子とプラスの電気をもつ陽子からできていて、プラスの電子やマイナスの陽子が無くなったのかという謎である。このために、一三七億年前の宇宙誕生時に素粒子の世界で何が起こったかを知る必要がある。我々は、第三のフィールド「宇宙とその過去」を探検している真っ最中である。

物理学者の活動する三つのフィールドを紹介させてもらった。第一が実験装置のある研究所、第二が世界をつないだ国際共同研究とネット会議、そして第三が宇宙とその過去である。第三のフィールドを解明すべく、第二のフィールドで日々活動する研究者が、実験装置を動かすときや、全体打ち合わせをするときは、第一のフィールドに集う。世界中からの研究者が一堂に会しておこなう国際共同研究は、なかなか楽しいものである。

J-PARC 加速器（提供・独立行政法人日本原子力研究開発機構）



スーパーカミオカンデ
（提供・東京大学宇宙線研神岡宇宙素粒子研究施設）

京都でおこなわれたニュートリノ国際会議に集まった研究者

要注目！

人間学のキーワード

マーケットデザイン

Market Design

安田洋祐（やすだ ようすけ） 政策研究大学院大学助教授

「マーケット（市場）」の「デザイン（設計）」を意味するマーケットデザインは、近年急速に発展している経済学の分野である。伝統的な経済学が、既存の市場や制度を与えられたものとしてとらえ、その機能を解明することに注力してきたのに対して、マーケットデザインでは、イチから制度を設計、あるいは変更することを対象とするのが特徴だ。人びとの動機（インセンティブ）に基づいて経済現象を解明する、という経済学の分析手法を生かして、現実の制度設計や市場の失敗を克服する具体的な手法を研究・提案している。二〇一二年には、この分野の第一人者であるアルビン・ロスと、ロイド・シャプレーにノーベル経済学賞が授与された。

理論を補完するために、工学的なアプローチがしばしば用いられる、というのもマーケットデザインの大きな特徴である。単純に数理モデルを構築するだけでなく、提案されたしくみがうまく機能するかどうかをより客観的にテストするため、被験者を集めて新しいしくみを仮想的にプレイさせる実験や、コンピュータによる数値シミュレーションなどを積極的におこなっている。さまざまな角度から事前チェックを重ねることで、机上の空論に陥るのを防ぐことができる。

さらに特筆すべき点として、この十数年ほどで、マーケットデザインを通じて提案された具体的な制度が、ほぼそのままの形で現実に応用され始めている、という現象があげられる。すでに世界各国で実施されている、電波周波数帯を割り当てる電波オークション、臨床研修医マッチング、公立学校の学校選択制、臓器移植の交換プログラムなどがその代表例である。臨床研修医マッチングは、医学部を卒業したばかりの研修医とその配属先の病院を中央集権的にマッチングさせる。日本でも二〇〇四年に導入され、毎年約八〇〇〇人を超える研修医が、この制度を通じて病院へと配属されている。各学生は自分が研修を希望する病院のリストを、各病院は自分たちが採用したい学生のリストをそれぞれ優先順位をつけて（インターネットを通じて）提出すれば良い。あとは、ノーベル賞を受賞した理論にもとづいて、お互いの満足度をもっとも高めるマッチング結果が自動的に導かれる。学生、病院の双方にとってメリットが大きいしくみなのである。

現在までに、マーケットデザインが大きな成功を収めてきた応用例は、オークション設計とマッチング・メカニズムのふたつである。オークション設計はお金のやりとりを通じた経済活動、マッチング・メカニズムはお金を直接使わない経済活動のデザインを扱っている。上述した例が示しているように、「マーケット」をデザインするといっても、金銭の授受を伴う狭い意味での市場だけを対象とするわけではない。むしろ、より広い「交換の場」のマッチングについて議論することができるのが強みだ。今後も、マーケットデザインの活用は徐々に広がり、わたしたちの身近な生活に浸透していくだろう。ぜひ、この新しい分野に注目して欲しい。

異聞逸聞

ベトナム市民社会フォーラムの誕生

伊藤正子（いとうまさこ）　京都大学大学院准教授

「穏やかな」変革

「国家体制を変革する」。社会主義革命を果たしたはずのベトナムで、何事か、と思うだろう。今年九月二三日ネット上でこのフォーラムは結成された。それでは筋金入りの反体制派の集まりかというと、そうではなく、発起人は情報学専門家、省庁の元次官、複数の共産党書記の秘書も務めた経済専門家、国立の社会学研究所の元所長で、現政権下で地歩を築き退職した知識人たちである。加えて二三〇人の賛同者（国外在住ベトナム人も含む）が署名した声明が発表された。声明ではフォーラムの目的を「わが国の政治体制を全体主義から民主へと穏やかに変容させることへの貢献を目指し意見を交換し集約する」としている。「穏やかに」とはいえ、明確に体制変革をうたっている。なぜだろうか。

ベトナムでは二一世紀に入り、ネットを通じた「市民社会」の形成が見られるようになってきた。ここ二、三年のあいだに、領土問題でもめる中国に抗議するため、元来禁止されているデモを都市住民が組織したり、農民に二〇年間の使用権を与えていた土地を期限が来たとして地方政権がとりあげたため土地紛争が全国で頻発するなど、社会問題が噴出している。こうしたことに政府は力づくで対応することが多く、それを批判したブロガーやジャーナリストが逮捕され政治犯が急増している。共産党の一党独裁による自由・民主の制限がこれらの背景にあるとして登場したのが今回のフォーラムである。

日本が輸出する原発の建設予定地ニントゥアン省タイアン村

全体主義から民主へ

昨年五月には、日本政府にベトナムへの原発輸出をやめるよう求める署名集めもネット上でおこなわれた。この呼びかけ人も今回のフォーラムの賛同者に入っているが、不思議なことにフォーラムの声明文では「原発」には一切触れていない。ベトナムでは、じつは福島の事故のその後は情報統制によってあまり伝えられていない。そのため目の前の諸問題と比べ、知識人のあいだでさえ関心は高くないのが実情だ。このフォーラムに政権がどう対処していくか現時点では不明だが、是非原発輸入についても取り上げてもらいたい。声明はさらに政権に対し、「公民の意見を表明する権利を尊重し、誠実に論争し対話し、不公平で不明朗で非公然の対処をやめるように」と呼びかけている。「全体主義から民主へ」という目標は、多くの民意を無視して原発再稼働と輸出に走る日本も民主国家を標榜するかぎり共有すべきではなかろうか。

制服の世界
THE UNIVERSE OF UNIFORMS
世界の制服

この王宮では楽師の舞台が衣装によって現出され、
衣装によって解体される。
楽師たちの制服がもつ力とは……。

王宮の楽師——ジャワ島西部チルボンのスカテン

福岡 正太（ふくおか しょうた）
民博 文化資源研究センター

スカテン初日

しばらく前から王宮の前庭は人でごったがえし、身動きをとることもできない。時計は夜の八時少し前を指している。係員がやっとのことで道を作ると、王があらわれ、静かに楽器の前に陣取った。

八時。人びとが一斉に小銭を投げ込むと、喧噪のなか、演奏が始まった。スカテンとよばれる行事の実質的な幕開けだ。預言者ムハンマドの誕生日を記念しておこなわれる。スカテンという名称は、彼らが演奏する楽器の名ゴン・スカティに由来している。一五世紀末、ジャワ島西部北海岸の町チルボンの王国を隆盛させたグヌンジャティ王は、この楽器を用いて、人びとをイスラム教に改宗させていったと信じられている。

楽師が身に着けているのは、タクワとよばれるつめえり風の上着、ブンドとよばれる帽子、それにロウケツ染めバティックの腰衣である。王宮に仕える者の正装だ。材質や仕立ての違い、豪華な装身具の有無はあるが、基本的に王族の正装もほぼ同じ構成である。王宮の伝統的な行事では、男性はたいていこうした衣装に身を包む。

普段、このコーナーでは、制服姿できりっと立つ人びとの写真がかかげられている。が、残念ながら今回は座っている姿の写真しかない。なかなか彼らがそろいの制服で立っている場面を見ることができないからだ。彼らは、演奏が終わると、その場で衣装を脱いでしまう。下には普段着の洋服を着たままだ。

演奏モードの衣装

スカテンの楽師たちは、この日から五日間、一日七回、二〇時、二三時、三時、七時、一〇時半、一四時、一六時半に、それぞれ約一時間一〇分ほどゴン・スカティを演奏する。もっとも演奏の間があくのが夜中から朝にかけてで、約三時間弱の休憩時間がある。逆に、一四時と一六時半の演奏の間には、一時間ちょっとの休憩時間しかとれない。一回の演奏が終わっても、家に戻って用事を済ませる時間もほとんどない。否応なく、スカテンの期間中、楽師たちはほとんど王宮の前庭で暮らしているような状態になる。

奥さんや家族が、臨時の露店を出して商売している者もいる。その場合はなおさらだ。一家で一日中、ゴン・スカティの演奏場所で過ごすことになる。まさに演奏場所と生活空間が重なっている。だからこそ、演奏が終わった次の瞬間には制服を脱いで日常に戻ろうとするのだろう。この衣装だけが、彼らの演奏モードと日常モードをわけるものであることがよくわかる。

バティックを制服にする

スカテンでは、楽師のほかにもさまざまな役割を果たす人びとがいて、それぞれがそろいの衣装を身に着けている。そのなかには、バティック・シャツを制服としている人びともいる。この年は、場内整理係がバティックの制服を着ていたようだ。バティックは、二〇〇九年にユネスコの無形文化遺産のリストに記載された。そのころから、インドネシアではバティック着用運動も盛んになり、バティックを制服とすることが、ますます増えている。

チルボンのバティックのモチーフとして有名なのは、メガムンドゥンとよばれる雲のデザインである。グヌンジャティ王の妃の一人が中国の人だったことにも象徴されるように、チルボンの王宮には中国に由来するものが多くみられる。メガムンドゥンはその代表的な例だろう。よく見ると、楽師の腰衣のバティックにもメガムンドゥンが描かれている。

ゴン・スカティを清める。
演奏時とは異なる制服を着用している

演奏中の楽師たち。下には普段着を着ている

演奏が終わるとすぐに衣装を脱いで日常モードにもどる

スカテンのあいだ、演奏場所は楽師の生活の空間にもなる。楽師の家族は周りで露店を開いている

バティックシャツの制服を着用したスタッフ。
中国の雲の模様を取り入れたバティックがチルボンの特徴のひとつ

12月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■ 14 時 30 分から 15 時 30 分
■ 12 月 1 日は展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。
どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

1日（日曜日）
話者：平井京之介（国立民族学博物館 教授）
話題：タイで働くということ
会場：本館展示場（東南アジア横休憩所）

8日（日曜日）
話者：鈴木紀（国立民族学博物館 准教授）
話題：ボリビアのカカオ・フェスティバルから「世界」を見る
会場：本館第３セミナー室

15日（日曜日）
話者：岸上伸啓（国立民族学博物館 教授）
話題：アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨
会場：本館第３セミナー室

22日（日曜日）
話者：太田心平（国立民族学博物館 准教授）
話題：急増する生涯独身者、そこから読み解く韓国現代事情
会場：本館第３セミナー室

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。
詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00 ～ 17：00）

編集後記

外国から日本に帰国してホッとすることの定番の一つは「白いご飯」らしい。私の場合は、どっぷり浸かれるお風呂と畳であり、ご飯にはそれほど執着しない。昔、フランスに長期滞在した際には、二年間ほとんど白米を食べずに過ごしたが、禁断症状もなく、ワインとバゲットとチーズがあれば幸せだった。おいしいければ、パンでも、麺でも、じゃがいもでも、私の味覚は満足する。

こういう輩（やから）が日本に増えたために、「減反制度」というものが導入されたのであろうが、その制度が見直されているというニュースが目につくようになった。政治・経済にはどちらかというと疎いので、減反が廃止された場合の波及効果が今一つ読めないが、田園は増えるということなのだろうか。電車や車で遠出をせずとも、身近なところで青々した稲田の風景に出合うことができるようになったら、日本も捨てたもんじゃない、と思えるかもしれない。そのためには、ご飯をもっと食べなければ。
（山中由里子）

●表紙　大阪「新梅田シティ」の「新・里山」にある水田。地元の子どもたちの自然体験に活用される。

次号の予告

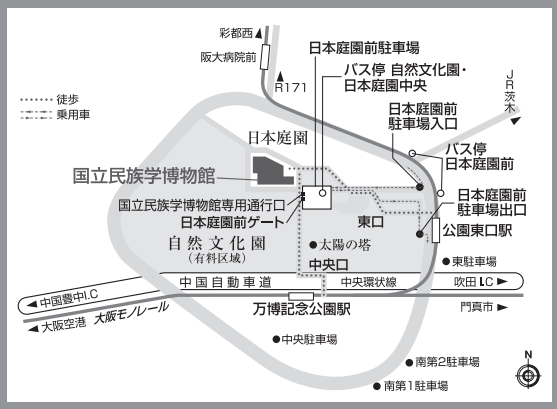
特集
馬

月刊みんぱく　2013 年 12 月号
第 37 巻第 12 号通巻第 435 号　2013 年 12 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒 565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　八杉佳穂
編集委員　山中由里子（編集長）　樫永真佐夫　久保正敏　庄司博史　菅瀬晶子　丹羽典生　野林厚志
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
http://twitter.com/MINPAKUofficial